

なりません。しかし、休憩・休憩時間における飲食は基本的に認められています。さらに、服装や髪型、通学・通勤方法、自転車走行時のヘルメットの着用、言葉遣い（敬語）なども、生徒と先生は異なるのが通例です。その整合性とか、統一性とかを理解し、納得することは非常に難しいと思いますが、決して矛盾でも、不合理でも、また、差別でもありません。」と指導しても……、

まず納得しないでしよう。

なぜなら、この意見は、児童・生徒の成長上のキーワードの一つである、価値観の幅広さを示すダブル・スタンダード（二重規範）の問題であるからです。

そして、多くの中学生は、乳幼児期からの様々な体験を通して、誰もが絶対に遵守しなければならぬ単一の規範（価値観）を理解した上で、世の中には、偉いとか偉くないとか、差別とかではなく、時と場と人によって、許されることと許されないことがあるという二重規範がごく自然に身に付いています。この二重規範が身に付いていない中学生は、生徒にも先生にも一つの規範を頑なに求めるからです。

ダブル・スタンダードは、「広辞苑」によりまずと、「同一の事柄の判断に、異なる二つの基準を用いること。二重基

準。」という意味です。「三省堂国語辞典」は、「対象によって、適用する基準を（不公正に）変えること。二重基準。」としています。

すなわち、ダブル・スタンダードとは、一つの事柄（現象・事件・出来事・政策など）に対して、国内と国外、部内と部外、上司と部下、賛成側と反対側など、異なる相手（対象）に応じて、それぞれ異なる価値判断を都合良く使い分けたり、適用する基準や指針を意図的に変えたりすることと考えられています。

したがって、ダブル・スタンダードという言葉は、二枚舌とか、その場しのぎの言い逃れや虚言とかの意味・用法で使われることが多いと思います。

立科中学校のJeffrey Krueger先生にお訊きましたところ、アメリカでもイギリスでも、Double-Standardは道徳的に恥ずべき行為と考えられているそうです。

昨今、テレビで国会中継や、そのニュースを視聴していますと、「これが直き心の国、日本か。」という、日本や世界の未来を担う子どもたちには見せたくないような光景が何度も映し出されました。国会で審議される法案に賛否があるのは当然で、その政治的な判断は国民一人一人に委ねられるべきです。しかし、ダブル・スタンダードが罷り通る国会審

議には、深い憂いを禁じ得ません。老いの身にありがちな杞憂ならばよいのですが、日本を先導する政治家諸氏のダブル・スタンダードによって、将来の日本に取り返しのつかない禍根を残し、子どもから教育を奪ってしまうのではないかと案じているのです。

二枚舌と同義語のようなダブル・スタンダードという言葉は、なぜ児童・生徒の成長上のキーワードの一つと考えているのか、と申しますと、ダブル・スタンダード（二重規範）の対義をなす単一規範（規範が一つで、すべての状況が同じ規範の適用を受けること）に悩み、苦しんでいる中学生が決して少なくないからです。

○常に「良い子」で、親の期待に応え続ける自分でいたい。

○愚痴をこぼしたり、自分の「ボロ」（失敗体験や欠点、弱さ、未熟さ）を出したり、悩みを他人に相談したりせず、自分の問題は自分自身の力で解決し、克服しなければならぬ。

○嘘はいけない。だから、どんなことがあっても、自分は絶対に嘘をつかない。○努力を継続できない自分、やると決めたいことができない自分、そして、できる人をついに妬んでしまう自分は、駄目な人間だ。

誠実で、真面目で、責任感が強い中学生ほど、このような単一規範を守り通す自分でありたいと願い、懸命に努力しても、完璧にできない自分を必要以上に責める傾向があります。

このような、「かくあるべき」という一つの規範にとらわれ、自分の生きる世界を狭め、自分を追い詰めている中学生に、「そんなに頑張らなくてもいいんだよ。背伸びをせず、ありのままの自分……。」「ボロを出そう。気持ちが悪くなるから。」「人をだまして、迷惑をかけたから。」「人をだまして、迷惑をかけたから。」「人をだまして、迷惑をかけたから。」「人をだまして、迷惑をかけたから。」

児童・生徒の成長上のキーワードとして、子どもたちが、ダブル・スタンダードには、善きダブル・スタンダードと悪しきダブル・スタンダードがあることを理解し、善きダブル・スタンダードを身に付けてほしい、と願っています。

フリーターキングのときに感じた不安は、まさに的中してしまいました。同じような発言が相次ぎ、生徒指導の教師も説明を求められましたが、やはり納得には至らず、結局、時間切れのため、何とも後味の悪い閉会を迎えたのです。